R5 実践活動報告書

～KIZUNA の活動から生まれるお互いに利益をもたらす連携～

小林市地域日本語教室 KIZUNA・李（り） 妍（けん）

■ 小林市&地域日本語教室 KIZUNA の概況

小林市ホームページより

1. 小林市について

宮崎県の南西部に位置する自然豊かなまちである。

外国人数が626人（2023年7月現在）となり、市全人口の 1.5%を占めている。

市全体の人口が減少するなか、外国人数はこの10年で約2倍に増加しており、この傾向は今後も続くものと考えられる。

2. KIZUNA について

KIZUNA は小林市役所地方創生課に立ち上げられた、生活者を対象とした地域日本語教室で、今年度は運営して4年目になる（R2～R4年度：文化庁地域日本語教育スタートアッププログラムを活用→R5年度～：市の多文化共生事業の一環として活動を展開）。生活支援をベースとした対話型の教室と教室の外へ出ていくスタイルのものをバランスよく実施していくのが市の方向性となる。

・教室の内容： 生活場面トピック ＋ イベント型

・実施方法： 中心地型（R5年度は、前期と後期各8回） ＋ アウトリーチ型 （+オフ会）

■ 本研修における課題設定&主な取り組み

現行の教室の改善点を考え、以下の課題を設定した→外国人住民と地域の関係機関とのつながりが不十分であり、お互い情報アクセスできないことがある。KIZUNA の教室活動を通して接点を作り、お互いの情報にアクセスでき、お互いにメリットをもたらす場を作りたい。

課題設定の背景	課題解決のための主な取り組み	KIZUNA 教室	どのような情報？ どのようなメリット？	実施状況
地元の企業が観光などについて外国人住民に発信したいが、情報を把握していない、接点ができていないことがある。	地元企業小林まちづくり株式会社とコラボでバスツアーを催行。	R5 中心地型教室 前期第⑦回 【バスツアー】	・KIZUNA の参加者にとっては：地元の観光情報、交通アクセス情報を手に入れる→余暇を楽しめ、住みやすくなる ・小林まちづくり株式会社にとっては：在住外国人の好みなどを把握→旅行プランの改善に生かし、地元の良さを発信	・2023年10月1日 ・企業と KIZUNA 共催 ・参加者数：22 名 ・参加して良かった：100% （アンケート結果より） ★★★★☆
関係機関の担当者の人事異動により、長期的な関係の構築に努力が必要である。	・小林警察署の方に教室の様子見に来ていただく。 ---------- ・自転車安全講習会を実施。	R5 中心地型教室 前期第⑤回 【防災】 ---------- R5 アウトリーチ型教室	・KIZUNA の参加者にとっては：交通ルール、防災防犯について学ぶ→安全に暮らす ・小林警察署にとっては：外国人住民の困り事や普段生活している様子を知る→地域安全を守ることにつながる	・2023年9月3日に教室見学は予定通りにできた。 ・2023年11月25日に自転車安全講習会は実施したが、都合により、保険会社の方が講習会の講師を務めていた。今回、小林警察署との連携はできなかった。 ★★★

中心地から離れている地域に民間団体があり、自主的に国際支援交流の活動を行っているが、そちらと KIZUNA との情報交換は十分できていない。	KIZUNA の参加者を連れ、オフ会の形で民間団体国際支援交流の会が開催するクリスマスコンサートに参加。	R5KIZUNA オフ会	お互いにとっては：活動情報の共有→分散されている力を合わせ、より良い国際交流活動ができる	・2023年12月17日 ・団体主催、地方創生課後援の形で実施 ・参加者数：32名（その中 KIZUNA メンバー13名） ・参加して良かった：100% （アンケート結果より） ★★★★

■ 活動の様子

バスツアー記念撮影

団体の方がギター
を演奏している様子

クリスマスプレゼント
をもらった参加者

小林市多文化共生推進隊の Facebook と Instagram より、KIZUNA 教室の様子や他の多文化共生についての取り組みがご覧できます→→→

■ 実践活動を通して考えたこと

①どの連携においても、お互いに求めているメリットを明確した上で、活動を計画・デザインするべきである。
②活動を進めていくなか、諸事情により実施時間や内容に予定とのずれが生じることがある。焦らずに柔軟に対応していく姿勢と、随時にスケジュールを調整する能力が必要。
どうしても実現できない場合は、優先順位を決め、今の段階でどの程度まで進められるかを考え、現時点で最良の結果を出す。
③コーディネーターとして、「足」と「目」の併用が大事。
④連携・利用可能なリソースを発見すると同時に、KIZUNA 自身も相手に対して良いリソースになるために工夫しないといけない。

■ 今後の展望

今年度の実践活動を通じて、観光分野のプロや、長年外国人支援を行う団体など、異なるバックグランドを持つ方々の多様の考え方ややり方に触れ、情報・リソース共有の場だけでなく、意見交換の場にもなった。異なる視点を尊重しながら実施済みの活動を振り返り、成功した要素を取り入れ、改善が必要な点を修正し、より良い活動を計画したいと考えている。

また、連携先からは「やって良かった」との好評を得ており、今後の活動に向けて少しであるが、話が進んでいる。来年度以降は、活動の内容や形を変えつつも、継続的な連携を築いていく意向である。

さらに、実践を通して、「相互の利益を明確に提示すること」の重要性を実感し、今後の連携構築においてもこのポイントを重視したいと思っている。